

九十九里郷土研究会 郷土研通信

第7号

会長 内山いつ
事務局 長 村松 英一

町 5 5
里 6 7
生 0 4
の 0 0
九 1 0
中 4 0
十 1 0
九 1 0
田 4 0
電 7 6
話 7 6

会員数 60名

平成30年
3月1日現在

設立 平成22年
4月17日

待望の『会誌伊和志』

第2号が発刊!

『伊和志』第二号

発刊に寄せて

秋原 芳枝

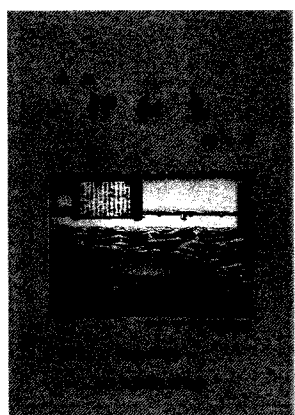
(辰巳流裕の会 会主辰巳裕寿)

本会の「郷土に関するあらゆることを研究対象とし、その成果を郷土に還元する」という目的達成の一つとして、3年振りに『会誌伊和志』第2号を出版することとし、8ヶ月間に渡って取り組み、12月に完成し、発刊しました。

そのきっかけは、内山会長が「九十九里町に戦後、米軍基地があり、その騒音や米軍人の事故、環境の乱れなど、負の側面が大きく、そのことを知っている人も年々少なくなっている現状から、『戦中戦後の体験』をまとめた」という願望からでした。早速、創刊号に習い、「I論ずる」・「II学ぶ」・「IIIつれづれ」とし、IIに「戦中戦後の体験」という項目を設けました。

ところで、本『会誌伊和志』は「会員が原稿を寄せ合って作り上げる『郷土誌』」を目指しています。専門的な人たちに原稿を依頼して、それを出版するのではなく、日頃から文章を書き慣れた人は勿論、学校卒業以来、原稿用紙に縁のない人、生来、物書きを嫌う人などが「恥をかく」書く「つもりで原稿用紙に文字を書いて提出するよう、呼び掛けました。

その結果、会員の約90%の方々の投稿を得ました。中には、会誌発刊の声を上げた責任からか、会長自ら会員宅を訪問し、話し合いの中から題名や筋書きを示唆したり、話を聞いて、自ら書き上げたりなど、「涙ぐましい」努力があつたことも忘れてはならないと思



も、受け取つそれにしても、受け取つ

拝読させていただきました。郷土史研究に多くの時間を積み重ね、古文書の発掘、神社仏閣の歴史等、細やかな描写に写真や挿絵に至るまで盛り沢山の内容で勉強させていただきました。

又、文化面では、いわし漁で栄えた豪商、網主の力添えで訪れた多くの文化人の事等、改めて知る事が出来、豊かな九十九里の息づかいが聞こえてくる様な内容でした。

豊海小・中学生の作文は、当時のままを掲載したものと同じです。あの遠い日々の子供達は何を見て、何を感じていたのでしょうか。この作文の中には、子供の目線での戦後の苦しみ、貧しさ等の情景が昨日の出来事の様迫つてきて、胸の熱くなる想いがいました。

会員の皆様方の手記は、お人柄がにじみ出てた原稿をパソコンに打ち込みましたが、その誤字脱字の多さに、我ながら甚く歳を感じた次第です。

そして、10月に中村印刷に原稿を引き渡し、4回の校正を経て、12月15日に発刊に至りました。本号はカラー表紙の他に、カラーのページを加えたにも拘わらず中村印刷様の非常なサービスにより出版できたことも蔭の功労者といえます。まさに赤字を覚悟の上の取り引きであつたろうと、「感謝!」、「感謝!」です。

その結果、多彩な内容による、素人の手作りによる『会誌伊和志』が出来上がりました。会員の皆さん、ご協力頂いた会員外の方々ともども、「拍手!」、「拍手!」です。(編集長/本保)

いて、体験の中より目標を見つけ、前進する力強さは現在のご活躍に繋がっている事と思ひます。

戦争体験には、沢山の犠牲の中に命の重さ、平和への願いを考えずにはいられません。私の父は、満州の戦地で右手を無くし、傷痍軍人となつて帰つて来ました。部隊は壊滅状態になり、戦友の多くは戦死したそうです。生き残つた自責の念と不具となつた自分との永い戦いの日々だつたそうです。

野戦病院での無気力な生活の中で、内地からの慰問団の懐かしい日本の歌や踊りに涙し、勇気を貰い、リハビリに皆な頑張つたと聞いています。私に日本舞踊の稽古をさせてくれたのも、その時の想いがあつたからだと思います。

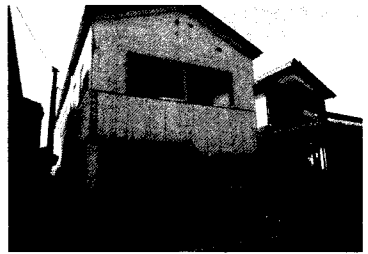
私が地域の方々のご協力を頂きながら、ボランティア活動を続けて行けるのも、父の存在があつたからと思つています。

戦後七十四年余を過ぎ、伝えて行かなければならないことが多く有ります。『伊和志』第二号の発刊は、現今の世情の中に大きな意味を持つ事でしょう。最後に関係者の方々的情熱とご努力に對しまして感謝と共に敬意を申し上げます。

豊海県道の真亀交差点の手前、右手に真亀三五自治区民会館があり、入口に立つ「消防館之址」の碑には「昭和三十二年真亀海岸に駐留の米軍射場の閉鎖に伴い、射場内の財産の保全と警備を当時の消防第十五分団が委嘱をうけ、その代償として建物一棟を払

<4> 写真で見る 九十九里町の史跡

真亀 消防館之址



下げ、この地に移築し、永年に亘り区民の公共の場として共用した。新集会所建築を機に往時の輝かしい功績を讃えこの碑を建つ」とある。

中西月華逸話 (1)

多趣味の文化人、中西月華

齊藤 功

片貝海水浴場の恩人、文化人、村おこしの恩人、俳句運動の人、読書の人、そして、業局経営者。中西月華(本名忠吉、明治六年一八七三、昭和二十六年一九五五)には、多彩な顔があります。これは、幼少の頃からの性格だったようです。

「私が文学を好む様になったのは幼年時代からで、十二歳の時(明治十七年、引用者注)東京の岡田大叔母から貰った本の中に、外山正一、井上哲次郎、矢田部良吉、三氏の『新体詩鈔』があった。その本の中にロングフェローの『野寺の鐘』や『三人の漁師』のくだりを愛誦し、小学校に入ってから唐詩選を愛読した(月華句集『やつさかこ』昭和二十五年発行の序文)とあります。

また、「潮騒に慣れて小学校に通った頃、私は俄に父の早世に会い、東京に遊学することになった。専門の薬学校に通って、たまには寄席や芝居を覗き、明治時代に残る江戸気分にも触れた。帰来、業務の傍ら交遊を好んで、同士の文学雑誌を刊行し、向上会を起して地方文化の向上を計り、清聲会を作って俳句を研究した。謡曲は九番習を終わり、能楽の鑑賞が出来る。絵と写真は早くから好んで、絵葉書を作つて片貝を海水浴場として、江湖に紹介することの出来たのは予期せぬ収穫であった(中西月華著『濱管』開局五十年記念刊行、昭和十三年、巻末記)ともあります。

筆者は、月華の三男中西三郎先生(明治三十三年一〇月〇日、平成三年一九九一年)に成東高校で教えを受けて以来、時折、月華につ



中西三郎先生(明治三十三年一〇月〇日、平成三年一九九一年)に成東高校で教えを受けて以来、時折、月華につ

「万祝」を寄附される

「活用を！」と

江戸時代より明治・大正・昭和と、九十九里は「イワシ漁業」で栄えていました。特に豊漁期の「揚線網」は、海の町、九十九里を活気に包み、好景気に沸いた日々で、網主なくしての時代でした。豊漁の後には、「万祝」が支給され、各網主、



ました。各網主、特有の模様と印を染め抜いた長派手な木綿の背流し(いなせ)に、思ひ出します姿を流して、元網主宅(甲良丸)の屋号「やけどん」のご主人、鈴木猛氏より本会に、「万祝」を寄附されました。ご紹介した

を伺いました。これから月華の残した俳句・文章・日記・絵葉書・スケッチなどの作品の森を逍遙して、月華の紹介をしていきます。

月華は、生来の記録好きでした。ノートに記された自筆の『中西月華翁年譜』もその一つです。中扉には「中西忠吉六十年までの日誌、中西月華(幼名藤二郎、本名忠吉)、生まれてから私の生活(処世年表、生活年表)、浮世の坂すぎて花(月)見る十二年」とありますように、単なる自歴でなく、当時の出来事や村の様子を書かれていて世相を知るのに役立ちます。

明治十四年(一八八一)、本隆寺内に創立されたばかりの片貝小学校へ行きました。当時はどこの村も自立の小学校はなく、お寺を校舎にしました。隣の真亀村の小学校も浄泰寺にあり、村はこれま

ました。そして、明治とは言っても、村はこれまでの幕末の様子で色濃く残っています。忠吉(大)人になるまで、本名で言います。筆者注)は、入学前に近所の手習い師匠「しんたな」へ通つて、甚太郎が病死しました。三十九歳の若さでした。

「智恵子抄」ゆかりの地 智恵子の妹夫婦が住んだ「真砂亭」

真亀の蛭子神社の近くに料理屋「真砂亭」があり、四年前に百一歳で亡くなった母の話に、「まさこはヨイ、本家の横浜の叔母さんの家であつたヨイ」。かつて桜井酒造の当主、熊雄氏の妹さんが住んでいたようです。昭和十九年頃ではなからうか? 真砂亭に住んでいた斎藤新吉さん(智恵子の妹夫婦)宅には高橋生(成東高校)であつた一人息子(俊太郎)が居ました。家の北側の軒下で、「ミニ映画会」を開き、近所の子供たちが集まり、楽しんだことがありました。内容は憶えていないが、一枚ずつ取り替え、ガラス製のフィルムであつたと思う。(内山いつ記)



写真は現在、畑地の旧真砂亭跡

長男の忠吉が跡を取り、戸主となりました。家業は「大坂屋」という薬種商(現在の薬局)でしたので、祖父忠兵衛は忠吉に跡を継がすべく上京して、創立間もない「東京薬学校」(現、東京薬科大学)に入学させました。明治十九年(一八八五)、忠吉数え十四歳の時です。後に月華は、薬学校時代のことを「東薬時代の思い出」として『薬業の友』第五九六号(昭和十三年七月十五日発行)に載せています。

「もう五十年の昔語になる。其頃の東京薬学校は神田岩本町にあつた。明治十九年四月、私は入学試験をパスして入学した。校長は藤田正方先生、校舎は二階建てペンキ塗。玄関の右が職員室、左が教室。廊下伝いに平屋の教室と製薬化学分析実験室は別棟にある。玄関側の教室で国友民三先生の化学をきいた。陸軍薬劑の制服を着けて早口で筆記に困つたが、熱心に教えてくれた。大井玄同先生も薬劑官で、生薬の講義をした。(続く)

入会のきっかけ

内山 隆

昨年、町の文化祭で郷土研究会の展示の中に、片貝と和歌山を結ぶ地名があり、その中に、隣家である「須原（熊野屋）」が出ており、親しみを感じました。また、「歴史研究会」ではなく、「郷土研究会」であることに、昔のことばかりではなく、今後の九十九里町を見据えているように感じました。展示の部屋には、会長さんなどがおられ、私の家の墓が小さいことなど、昔を偲ぶほどのものはないことを伝えましたが、皆さん、気にされることもなく、入会することになりました。

私の家の屋号は「ごんべ」と言い、その昔は「カネジユウ」の商標で船を持っていたそうです。また、墓には、祖先が鎌倉から運んできたと言われる石（如意輪観音？）があります。さらに、仏壇にある「過去帳」には、文化文政時代からの戒名が記されており、戸籍には「権太郎」↓「初太郎」↓「衛」↓「幸一」↓「隆」と続いております。

昔を知ること、何の意味があるのか？ 何になるのか？ わかりませんが、昔話として、拳が赤ん坊の頭ほどあつたという曾祖父、初太郎の妹（としよさん）が嫁ぎ先（田中、大塚家）から自転車でスイカを持って来る際、家の寸前で落としてしまった無念さを繰り返して聞いていた祖母や母（一子）が女学校を卒業する頃まで共に暮らしていた曾祖母（蓮沼、関芳家から）の折り返し目正しい気性の話には、先祖の存在を実感できました。



米軍基地キャンプカタカイ

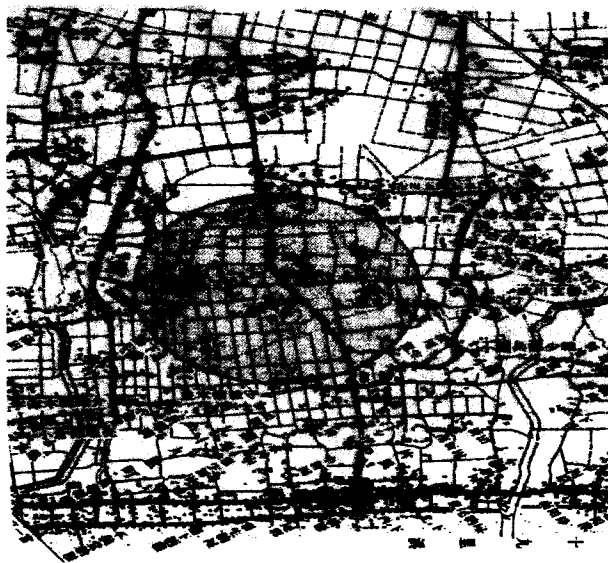
祖先が暮らしに来た九十九里は、太平洋という、外の世界に接した土地であり、父（母の婿）は、近衛連隊工兵として米軍の九十九里浜上陸に備える部隊にいたそうです。片貝沖には海谷の航路として重要視されていたのではないでし

江戸文化の流入と

その交通路

河野 巧

九十九里町の開発に後進的役割を果たしているのは、本町の地形である。その最大の障害素は、5mの等高線と3mのそれとの間に展開する沼沢群である。左図で見られるように、旧小関村地境より西南に延びる、宮島沼・弁天沼・浮沼・下沼・坊海道沼群がそれである。



(注) ●は沼地

ようか。私自身、ロシアで極東の地図に「KATAI」を見つけた時、外国の眼を感じたものです。また、本研究会の『会報』には、戦後、米軍キャンプが真亀に置かれ、基地反対の行動があつたと記されていました。現実には基地のある沖縄を他人事とは出来なかつたと思つた。地震による津波被害に関しても、過去の教訓は真に受けるべきです。海岸に住む、豊かさと同じ時に、皆さんとともに自然環境の独自性に理解を深めていきたいと思つています。

販売中!

『会誌』伊和志 第一号・第二号 各800円 (ご希望の方は事務局へ)

この開発は、江戸時代中期、一七四六年（延享三寅）の寅高入であつて、それまでは内陸部との交通を遮断し、長い間、文化の断層線の役割をしてきた。従つて、この沼沢群の北東端に当たる小関村と西南端に当たる藤下村とが文化に接触する最前線であつたに違いない。この両村と東金とを連携する交通路は、小関村―高倉村―宮村―中村―前之内―菱沼―田間村をつなぐ、いわゆる「田間道」である。砂押踏切（東金線）に「片貝踏切」と命名されてはいることも、この間の事情を物語っている。一方には、藤下村―西野村―広瀬村―川場村―城近―東金をつなぐ、いわゆる「川場道」がある。

江戸末期まで本町への文化に流入路は、北の「田間道」、南の「川場道」であつて、江戸への海産物、江戸からの学問・文化は両往還に幾多の華とロマンをもたらした。

江戸の文化が商品流通網のつて、文芸の大衆化が推進された。中でも郷土に残る江戸の文人画、特に天保の頃、高久齋屋（たかくあい）が、名は徹、字は子遠、通称秋輻・如樵、石巢山人、疎林外史、天保十四年1834没、四十八歳）と飯高霞邸（名は俊治郎、字は伯仁）とは交わりが深く、川場道を渡つて、池大雅、渡辺崋山、斎藤巻石等の名画が流入したのである。あるいはまた、昔遡つて飯高尚寛（しようかん）、惣兵衛（幼名清三郎、字は尚義、通称惣兵衛、牛歩、尚寛は号、文化二年1805没）、は俳諧にも精進し、江戸の加舎白雄の門人として一世を風靡し、晩年、『瀟瀟集』を著した。小河原雨塘（千葉曾我野村、廻船問屋、小河原七郎兵衛、天明八年181476没）、白井鳥醉（埴生郡の人、松露庵主、明和六年1769没）等も、この川場道を通つて粟生村に集まつたことであらう。

一方、江戸末期に至つては、江戸の折衷学派の儒学者たちが笈を負つて南総の瀬海の地に足跡を残している。その人々の中に、梁川星巖（やながわせいがん）夫妻、朝川善庵、遠山雲如、目黒白豚、長沼祐達、古川瑞庵等と枚挙にいとまない。これらの人々は、田間道を通じて、田中・小関の両村に入り、その止まる処に憩いの地を得て、寒村の青少年の教育に魂を打ち込んだのである。勿論、経済力のある網主をスポンサーとして活躍した。いわゆるイワシのもたらした文化である。

(平成30年2月17日の講演「窪世昌」について)の資料より)

九十九里町出身の相撲取り 高見山宗五郎 (そうごろう)

本保 弘文

高見山宗五郎(本名今関宗五郎、阿武山緑之助、二代高砂浦)は九十九里町粟生で生まれた。後に「千鳥ヶ崎」と名乗って宮相撲で活躍していたところ、東京相撲会所を除名され、「改正組」を結成していた東金町(東金市)大谷の高砂浦五郎(初代高砂)に誘われて「響山(ひびきやま) 宗五郎」の名で改正組に加わった。

明治十一年(1878)五月、師匠高砂が東京相撲会所と和解し、響山の処遇について、会所側は幕下格を提案したが、高砂は幕内格を主張し、これが通り幕内格として六月の初場所を踏み、六勝一敗二休一分と、見事に優勝相当の成績を上げ、師匠の面目を施した。

十五年(1882)一月に小結に昇進し、高砂の前名を継ぎ、「高見山宗五郎」と改名した。十七年(1884)の五月場所の八日目に梅ヶ谷を引き落としで破る大殊勲を上げ(梅ヶ谷現役最後の黒星)、翌十八年(1885)一月に関脇に昇進した。

その後、一七〇cm、七十九kgの小兵ながら、引き技を駆使し、三役として活躍し、二十一年(1888)五月に年寄五代阿武松(おのまつ)緑之助を襲名し、二枚鑑札となり、場所では三勝二敗三休二分の成績に終わった。

二十二年(1889)五月限りで引退し、年寄専役となり、師匠高砂を補佐し、「勝負検査役」も務めた。三十一年(1898)一月には病気の師匠に替わり、東京大相撲協会取締に就任し、三十三年(1900)に師匠が亡くなると、二代高砂浦五郎を襲名し、大相撲の重鎮として活躍した。温厚な人柄として周囲の信頼を集め、四十二年(1909)に相撲常設館の完成を見届けて辞任し、以後は別格年寄(相談役待遇)となり、相撲界の発展に寄与していたが、大正三年(1914)七月四日に六十三歳で相撲人生を終えた。



(注) 前頭時代の高見山

生涯幕内23場所、65勝59敗28分7領71休、優勝相当成績1回。

好評を博した本会の展示 町文化祭展示のアンケートから

十一月一日〜五日の町の文化祭に本会も展示の部に参加した。本会の展示をご覧になった方々の感想(一部)は次の通りです。

- ・作田家の古文書に口語訳があり、興味深く、良かった。
- ・展示がカラルで、見やすかった。
- ・伊能忠敬、関寛齋など郷土の偉人の展示がわかりやすかった。
- ・よく調べてあり、楽しく見られた。
- ・他地区のことでも楽しく拝見できた。
- ・「郷土研通信」が有り難かった。
- ・「伊和志」第二号に期待。
- ・郷土研究会に関心があり、即入会した。
- ・住民として郷土の歴史に興味あり。

事務局日誌

記/村松

- ・6月15日香取市伊能忠敬記念銅像建立 賛同金(五万円)送金(村松氏)
- ・6月24日編集委員会(於史想庵)
- ・7月11日 『伊和志』第二号の校正
- ・7月15日例会の資料印刷・準備
- ・7月15日例会(於中央公民館)
 - ・和算と伊能忠敬 染谷佳子氏
 - ・ありがとう、豊海幼稚園 小澤君代氏
- ・7月28日北総方面史跡めぐりの下見 内山氏、村松氏、本保氏
- ・8月5日編集委員会(於史想庵)
- ・8月19日役員会(於中央公民館)
 - ・文化祭の展示内容などの協議など
- ・9月8日農業大学教諭が海の駅を視察 内山氏が「イワシ漁」について解説
- ・「イワシ漁」についての解説資料の発行
- ・9月9日編集委員会(於史想庵)
 - ・『伊和志』第二号の校正
- ・関脇戦歴4勝4敗1休1預(9出・1場所)
- ・小結戦歴7勝7敗8休6分2預(22出・3場所)
- ・前頭戦歴54勝48敗62休20分6預(128出・19場所)
- △参考▽ 県文書館企画展「房総相撲博覧会」 ウィキペディア「高見山宗五郎」

- ・10月14日北総史跡めぐり準備
- ・10月16日北総史跡めぐり(23名参加)
- ・大原幽学記念館、飯高檀林、日本寺等
- ・10月17日編集委員会(於史想庵)
- ・『伊和志』第二号の校正
- ・10月22日例会(選挙のため中止)
- ・11月1〜5日町文化祭に参加
 - ・テーマ「ヨオ、知ってっかい！」
 - ・11月16日千葉テレビ取材(内山氏対応)
 - ・「ニシヤジヤチバ」の収録
 - ・11月30日11時放映
 - ・11月12日例会準備
 - ・講話資料の印刷・準備
 - ・11月18日例会(於中央公民館)
 - ・講話「教育勅語について」本保弘文氏
 - ・11月19日編集委員会(於史想庵)
 - ・『伊和志』第二号の校正
 - ・11月25日編集委員会(於史想庵)
 - ・『伊和志』第一号の最終校正
 - ・12月13日編集委員会(於内山宅)
 - ・『伊和志』第二号が完成、配布作業
 - ・12月14日例会準備
 - ・資料印刷・配布準備作業
 - ・12月16日例会(於中央公民館)
 - ・講話 みみずのたわごと 齊藤功氏
 - ・『伊和志』第二号配布
 - △平成三十年▽
 - ・1月10日町長さんとの話し合い
 - ・町誌資料集の発刊について 内山・村松・川島・内山菊の各氏出席
 - ・1月20日新年会(よしの寿司) 22名参加
 - ・2月17日例会(於妙覚寺)
 - ・講演 「窪世昌について」 河野巧氏

あとがき

『伊和志』第二号を出し終えてホッとしていると、内山会長から『通信』は毎年三月に出していますよね」と確認の催促。早速作業開始。電話にて「原稿はこれと、これがいいのでは？」というところ、一週間は原稿が届く。実に手早い(一頁の秋原氏は会員ではありませんが「祝辞」として頂いたものを掲載しました)。こちらも負けじとパソコンのキー打ちを始め、一週間余りで片を付ける。そして「これで3月17日まで仕上げて！」と中村印刷へ懇願。印刷所泣かせで出来上がったのが本号です。慌ただしく出来上がった次第です。(本保)